

## 幼児を対象とした運動技能研究の意義

杉 山 真 人

私たちが何気なく行っている運動は、精緻な神経基盤とそれに連動した筋の活動から成り立っている。これらは体育・スポーツのみならず日常を健やかに送るために重要な働きである。このような運動を丁寧に観察してみると、驚くほど複雑な動きを伴っていることに気づく。つまり、単純に見える身体運動も複雑であり、それが実現できるのは先に述べた神経や筋の働きが適切に制御されているためである。ただし、私たちは一つ一つの運動を意図して行っていることはそれほど多くはなく、そのほとんどは自然な動作として連続的に柔軟に実行されている。このような複雑な身体運動は、通常運動技能と呼ばれ経験を通して獲得される。私たちは運動技能を獲得し、その技能を生かして自分自身を操って（制御して）いる。アスリートや一般成人の運動技能の獲得やその制御の仕組みはとても複雑であろうことは想像に難くない。加えて、活動量としては多くないものの、月齢に応じた多彩な運動が見られることから、幼児の身体運動も同様ではないだろうか。つまり、成人の身体運動が複雑であり、そこに何らかの仕組みがあるとして、運動が未熟であろう幼児においても複雑な仕組みがあるのかもしれない。むしろ未熟であるが故の仕組みが備わっているのかもしれない。そのように考えると、幼児の身体運動は非常に魅力的な研究対象となるのである。以下では、幼児の運動技能を研究する意義について論じることとする。

出生後から2歳児頃（保育園や幼稚園の通園する前の幼児）を対象とした研究では、視覚、聴覚、筋感覚等の感覚情報と運動行動の関連について多くの蓄積がなされている。これらの研究は、言語的に幼児（実験参加者）とやり取りを通して研究を試みたり、質問紙等を用いるといったことは実質的に困難であるため、行動を観察し記録することが多い。ただし、当該研究の目的を達成するために、少数の研究から一般化しすぎることがないように気を付けなければならない。筆者は主に3歳児から5歳児の未就学児を対象としているが、この年代でも基本的には類似のことが言える。そのため、実験に際して実験参加者が課題の目的を理解しているのか、必要な統制はとれているのかなども含め、妥当性を担保するための配慮が常に求められる。この妥当性を常に念頭に置くことはあらゆる研究にとって重要であることは自明である。ヒトを対象とした研究に限ってみても、幼児は成人とは様々な面で異なる特徴を有するため、成人を対象とした研究以上に慎重な計画と準備が必要である。さらにいえば、研究倫理にも特に配慮が必要であるといえよう。研究に対する倫理的配慮が研究者に強く求められているが、幼児を対象にした研究こそ特にその重要性が求められているといえる。

では、このような年代の子どもたちを研究の対象とする意義は何かと問われれば、一つには未分化な個としての幼児が、分化した運動を実現するようになるのかという問いについての答えを探ることである。身体運動の大きな特徴の1つは自分自身を自分以外の他者の状況に応じて変化させることである。仮にその対象物が静止していたとしても、幼児自身が対象物に何らかの働きかけを行うことが求められる。例えば、止まっているボールを蹴るという

動作は自分自身のタイミングで運動を実行するが、ボールという対象物に自分自身の足を接触させるという課題が伴う。ボールをキャッチする場合のように、対象物が動く場合はなおさらである。オリンピックやパラリンピックのアスリート、プロスポーツ選手は極めて優れた技能の持ち主である。しかし、そうではなく一般的な人々も、程度の差はあれ標準的な技能水準で日々の暮らしを送っている。このような技能遂行の仕組みは当然、課題の内容、練習期間、練習の方法等、無数の要因の上に成り立っていると考えてよい。事実、それらに焦点を当てた研究の積み重ねがあり現在に至っている。他方で、幼児期を運動技能の獲得の起点とみなすことができれば、成人の運動技能の成り立ちをまた異なる角度から捉えることができるのではないだろうか。すなわち、未分化である運動機能が分化していき、私たちの日常の運動をいかに生み出しているのであろうか。そして、巧みで、柔軟で、しなやかな動きを生み出すのか。はたまた、ぎこちなさが消失しないものがあるとして、それはいかなる要因が関係しているのか。発達の初期段階ともいえる幼児期の運動を理解していくことによって、成人の運動制御を理解したり、それらのかかわりの中でどのような仕組みが内在しているのかを明らかにすることができるかもしれない。また、幼児期から始まる生涯の営みを運動制御という側面から包括的に理解することもまた可能となるかもしれない。

そして二つ目には、一つ目とは全く異なる観点であるが、就学後の体育授業等における知見を得るためである。これは、運動の上達に限れば、子どもが与えられた運動の習得をいかにしてサポートできるかという視点で語られることが多いが、必ずしもそれだけではない。授業者、すなわち教師がどのような授業を計画し展開すればよいのか、そしてそれが子どもたちの身体運動にどのような形で反映されるのかという視点は、学校体育にとってはとても重要であると考えられるためである。そのために就学児の運動についての理解が重要であることは言うまでもない。ここで強調したいのは、教師が未就学児期の子どもの運動についての理解を深めることは、その後の体育授業の計画に生かすことができよう。結果として教師にとっての戸惑いを減らし、教師をサポートすることにも貢献するものと思われる。これらのことから、教師をサポートするためには子どもの運動技能への理解がさらに進むことが必要であるといえる。

以上、幼児期の運動技能を研究する意義について述べ、その可能性についても言及してきた。幼児という限られた対象ではあるが、生涯にわたる運動学習や制御、学校体育、中でも教師の視点に立った言及を行ってきた。その研究の応用可能性は多岐にわたり、社会的な要請とも対応する。これからの豊かな社会の構築に向け、当該分野のさらなる発展が望まれる。